

尚 Rāmāyaṇa に伝えられる物語については、岩本裕「ラーマヤナ」

1 (東洋文庫 376, 平凡社, 1980) pp. 117-133.

又、この物語は哲学者 Hegel の知るところであった。

竹内敏雄訳 ヘーゲル全集 19 a 「美学」第二巻の上 (岩波書店 1965) pp. 898-902.

(6) この部分については W. Kirfel の二つの研究が参照される。

Rāmāyaṇa Bālakāṇḍa und Purāṇa (*Kleine Schriften* pp. 76-91).

Der Aśvamedha und der Puruṣamedha (*Kleine Schriften* pp. 179-190).

(7) Vaiṣṇava, Śaiva の他に梵天崇拜者の一群があり、彼らが他派の伝承を改竄したと思われる例は他にも認められる (K. Rüping, *op. cit.*, pp. 27-28, cf. Bock p. 41).

(8) 類似の方法論を用いて近時 Bock は今一つの別の神話の研究を発表している。

A. Bock, “Die Madhu-Kaiṭabha-Episode und ihre Bearbeitung in der Anonymliteratur des Pāñcarātra,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 137 (1987), pp. 78-109 (schematische Darstellung der Beziehungen der untersuchten Texte p. 108).

更に彼は二つの Upa-purāṇa にみえる同一主題をめぐって近時、別の論稿を発表した。

“Zwei Fassungen des Sāgara-Gaṅgāvatāra-Mythus im Mahābhāgavatapurāṇa und Bṛhaddharmapurāṇa, “*Hindusmus und Buddhismus, Festschrift für Ulrich Schneider* (Freiburg 1987) pp. 38-60.

M.W.マイスター編著

## シバ教討論集

原 實

本稿の筆者は近時、或る書肆の依頼によって Śiva 教、就中 Pāsupata 派について一稿を草したが、その折不覚にもここに紹介する M. Meister 編著の大冊のあることを知らなかった。北米の美術史家 St. Kramrisch 女史に捧げられた本書は1981年春、Pennsylvania 大学で開催された Symposium の紀要で、そこには24人の美術史家、図像学者と少数の文献学

者が寄稿している。本文340頁、Index10頁、Plate276枚より成る本書は近年の Śiva 教研究の成果として幾つかの卓れた論稿を含み、ゆめ見通さるべきものではなかった。就中 D. R. Bhandarkar, K. C. Panigrahi の研究を通してわづかに Lakuliśa 像の存在を知っていた筆者は約60の Lakuliśa 像 Plate をここに見出して、近時の美術史家による Lakuliśa 研究に眼をみはった。ここに同学の W. Halbfass を介して本書の惠贈を受けた筆者はその内容紹介を義務と感じて、以下に順を追って24の論文を概観する。但し執筆者の分野が多岐に亘るから、紹介といってもその理解におのずから深淺の度のあることは否み得ず、特に最後の音符を伴う論文は到底筆者の能く理解するところではなかった。この事を予め断つて置かねばならない。

第1章 *The Great Cave Temple of Śive in Elephanta : Levels of Meaning and their Form* (St. Kramrisch). 近時 Ch. D. Collins, U. Schneider が取り上げた石窟はここに別様に解釈されている。内陣に納められた liṅga, 四面(?)を有する巨大 Sadāśiva 像、更に周囲に位する八つの Śiva 神像はそれぞれこの神の niṣkala (超越), niṣkala-sakala, sakala (具象)の三位相を示すといわれる。又、Sadāśiva は有名な Pañca-brahman (五聖句)によって解釈される。

第2章 *Evolution of the Liṅga* (G. v. Mitterwallner). 先ず Guḍimallam Paraśurāmeśvara 寺院の Śiva-liṅga の年代を50B.C.-50A. D. と比定し、最初期(極めて写實的に描かれている)より12世紀に到る liṅga の形態の変遷を5期に分つて論ずる。この間に Bṛhatsaṃhitā, Purāṇa 文献の liṅga 製作規定(底部四角, 中部八角, 尖端 pūjya-bhāga 円形)に關説し, Brahmasūtra (縦2線), Pārśvasūtra (両側に抜がる線), liṅgapīṭha の原初的意義とその Tantra 的変容などの諸問題が興味深く論じられる。又、著者は元来の liṅga には豊稔多産が象徴されるのみで(この事は liṅga と共に現われる Yakṣa, 樹木, pūrṇa-kalaśa, 蓮によって立証される), Umā との結合に象徴される Eroticism 要素は皆無であったと結論している。

第3章 *Significance and Scope of Pre-Kuṣāṇa Śaivite Iconography* (D. M. Srinivasan). Kuṣāṇa 王朝成立前300年間の Śiva 神像(石と貨幣)が2期に分つて論ぜられる。各種 liṅga (ekamukha, pañcamukha を含む), 雄牛, 三叉戟, 琵琶 (vīnā-dhara), Ardhanārī, 蛇, 獅子(後3は第2期のみ)等の図像史上出現の順序が語られる。又 liṅga の地理的分布が所謂 Āryāvarta 以上には出ないことも報告されている。更に神の第3の眼, 多腕性も未だこの時代には図像上に現われない。他に liṅga の語義史に

触れ、Mahānārāyaṇa Upaniṣad の用例が解説される。この著者もまた liṅga が創造力、生命力の象徴以上のものでなく、ūrdhva-liṅgin も禁欲 (ūrdhva-retas) の標しに他ならないという。尚、この時代に Śiva の眷族や神話は図像上には未だ現われず、それは仏教のそれ (Bharhut, etc.) と著しい対蹠をなすといわれる。

第4章 *Early Forms of Śiva* (N. P. Joshi). 4-6世紀の間に貨幣、印章、彫刻に描き出された Śiva の特徴を、単独の Śiva、雄牛、獅子、象を伴うもの、Caturvyūhamūrti、Pārvatīを伴うもの、Ardhanārīśvara、Lakuliśa、Harihara、Rāvaṇānugrahamūrti、Bhikṣāṭaṇa-mūrti、Dakṣiṇa-mūrti、Aja-ekapād の13項目に亘って概観する。

第5章 *Nānd, Parel, Kalyāṅpur : Śaiva Images as Meditational Constructs* (Th. S. Maxwell). 象徴的にして謎めいたこの3つの Śiva 神像の解釈への試み。神との合一を念ずる信者の観照、冥想の対象として見れば、これらの神像の意味が解けるといふ。解釈の根拠として Liṅga-Purāṇa (1.23)、Pañcāyatana を提示する。第1章と同様に図像の象徴解釈の事例をここにみる。

第6章 *Saivite Images and Iconography in Nepal* (K. Deva). Nepal に在って Śiva は古く liṅga の形で (466A. D. 以降) 崇拝され、それらは随時銘文を有し、又 ekamukha, caturmukha としても残っている。既に6世紀にインドより神像作製の技法が導入されたが、7世紀初頭 Aṃśuvarman が篤く Śiva Paśupati を崇めるに及んで、Pāśupata、Kāpālika 派が優遇され、寺院造営 (Paśupatinātha, etc.)、神像彫刻が盛んとなった。Umā-Maheśvara 像も573年以来みられるが、この地で最も愛好されたものは3層に亘って Śiva の家族 (Umā, Skanda)、眷族 (Vijayā, Pratihāra, gaṇa) を描くものであった。屢々それは Gaṅgā-dhara の構図とも結びついているが、主題はむしろ Viṣṇudharmottarapurāṇa、Aparājitapṛcchā、Mat-syapurāṇa の他、就中 Kumārasāmbhava 11.30-50より採られていた。この他、Ardhanārīśvara、Harihara、Naṭarāja、Chatra-caṇḍeśvara、Ekapāda、Trimūrti、Bhairava も Tantra 的要素を時に含みながら、この地に盛んに造られていた。Nepal の Śiva 教研究に啓発するところ多い論文と称し得る。

第7章 *Lakuliśa : Saivite Saint* (U. P. Shah). D. R. Bhandarkar の研究に副って獣主派史 (碑文と Purāṇa に拠る) を概観し、その教団 (出家修行者と在俗信者)、行者の特殊行法を解説した後、Lakuliśa の像の特徴と分布を極めて要領よく説明している。Viśvakarman Vāstuśāstra によれば Lakuliśa は陰莖を露出させ (ūrdhva-meḍhra)、蓮華座 (padmāsana) に

座し、右手に拘攣 (mātuliṅga), 左手に杖 (daṇḍa) を持して描き出されることとなっている。両手に携える物を除けば彼の像は仏像、シナ像に似ているが、四腕を有して数珠や印契 (abhaya-, vyākhyāna-mudrā) を伴うものも少くない。北は Mathurā より、東は Orissa, 西は Lāṭa, Rājasthan, 南は Karṇāṭaka に彫像は分布して、この派は 6-8 世紀に最盛期を迎えている。座像のみならず立像もみられ、有名な彼の 4 弟子が書巻を手にして師を囲んでいるのがみられる。

第 8 章 *Lakuliśa and Early Śaiva Temples in Orissa* (D. Mitra). 獣主派が Gauḍa 王 Śaśāṅka (7 世紀) の庇護下にこの地方に栄えていたことは Koraput, Cuttack, Dhenkanal 地区等の寺院に Lakuliśa が 4 弟子に囲まれ、転輪法印 (dharmacakrapravartana-mudrā) を結んでいる彫像の存在によって立証せられる。しかし Orissa で最も重要な拠点は Bhubaneswar というべく、7 世紀以降獣主派はこの地に栄え、Paraśurāmeśvara を始めとする 3 寺院は Lakuliśa の坐像を多数蔵していた。それらは蓮の台座上に結跏趺坐、手に印契 (abhaya, vyākhyāna, dharmacakrapravartana) を結び、杖 (lakula) を左腕より左肩にかけるが、杖が右側にかかる場合もある。弟子は 4 人とも 6 人ともされ、屢々彼らは大鼓腹で書巻を手にする。又、Lakuliśa は 2 腕とも 4 腕ともされ、直立陰茎 (ūrdhva-medhra) の描出にも異同があり、彫像技法が一定していない。この事実は Vāstu-sāstra に複数の学派のあったことを指示するものの如くである。この地で Lakuliśa は既に Maheśvara の化身として神格化されていたが、その像が liṅga を祀る寺院の内陣にではなく、専らその外壁にのみ置かれている事実は注目に値する。筆者は U. P. Shah と D. Mitra のこの二編によって啓発されるどころ極めて大なるものがあつた。

第 9 章 *Śiva's Forts in Central India: Temples in Dakṣiṇa Kosala and "Daemonic" Plans* (M. W. Meister). 7 世紀、中央インドの煉瓦造り方形寺院建築の基礎構図がここに示される。それらが幾何学的によく計算されたものであり、又その基盤に Śulva-sūtra, Bṛhatsaṃhitā の規定のあったことが多数の図形 (figure) によって例示される。他に寺院と城壘との関係、工匠の神としての Rudra-Śiva の問題が論じられる。

第 10 章 *Placement and Significance of Erotic Sculptures at Khajuraho* (D. Desai). Khajuraho の二つの Śiva 教寺院 (Kandariyā Mahādeva, Viśvanātha, 11 世紀) に描かれた男女媾合図の意義を解明する。これらの像が mahāmaṇḍapa (信者の礼拝堂) と garbha-gṛha (神像安置の内陣) との接合重複部分 (kapilī) の外壁に描かれている事実は、この部分が信者と神との合一 (advaya), 現象界と超越の世界との接点 (saṃdhi) を意味

している以上、それら構合図は元来二重義 (śleṣa) を有し、且つ象徴的秘義的に解釈 (saṃdhyābhāṣā) されねばならないという。在来の解釈 (多産、豊穡、厄除け) の他に、Tantra による解釈が示され、傍ら Pāśupata, Kāpālīkā Kaula, Kṣapaṇaka にも関説するところがある。

第11章 *Myth, Cult and Cetanā at the Kailāsa Temple, Ellora* (D. C. Chatham). 8世紀の Rāṣṭrakūṭa 王 Kṛṣṇa 一世時代に建立された Ellora の Kailāsa 寺院の彫像群が三つに分類されて論ぜられる。その第一は叙事詩や Purāṇa に語られる Śiva (Durgā と Viṣṇu を含む) の神話を描出し (Andhakāśura-saṃhāra-mūrti, Tripurāntaka-mūrti, Mahiṣāsura-mardini, Rāvaṇānugraha-mūrti, etc.), 第二は liṅga を安置する garbha-gr̥ha の壁龕に置かれて信者の礼拝や冥想の対象となっていた個別の Śiva 神像 (Viṣṇu, 梵天像をも含む), そして第三はより民間信仰の要素 (Pāśupata, Tantra, etc.) を含んで禁欲 (yogic) と破戒 (erotic) の両要素を提示しているものとされる。

第12章 *Iconography and Significance of the Bṛhadīśvara Temple, Tanjāvūr* (R. Nagaswamy). この南インドの有名な寺院 (11世紀) は曾って Burton Stein の言ったように “funeral edifice” でも、“ritual sovereignty” を誇示するために造営されたものではなく、ひたすら王侯の私的・公的な宗教的功德を積むためのものであったという。その事は当地の bhakti 運動や、往昔北インドより移住したヴェーダの伝統を貴ぶ (vaidika-mārgin) Śiva 教会派 Pāśupata, Kālamukha の学匠 (彼らは多く -paṇḍita の尊称を有している) が王侯の Rāja-guru となっていた事実によって立証されるという。その構図が Makutāgama, Pañcadeha - Sadāśiva, Navatattva, Paramānanda Tāṇḍava の解明によって論述される。

第13章 *Forms of Śiva in Sanskrit Sources* (C. Sivaramamurti). 図像と文献との比定、対照は美術史研究の重要な一環を成す。よってここに Kalyāṇasundara-mūrti, Gajāntaka-mūrti, Tripurāntaka-mūrti, Gaṅgādhara, Liṅgodbhava, Kālāntaka, Vaidyanātha 等が Vājasaneyi-saṃhitā (Śatarudriya), Taiittiriya - saṃhitā, Śatapatha - brāhmaṇa, Kālidāsa の諸作品, Ānandalaharī, Śivalīlārṇava 等と対照されて概説される。

第14章 *Śiva-Naṭeṣa: Cadence and Form* (K. Vatsyayan). 古典インド並びに東南アジア舞踊の文献学的研究によって夙に令名を馳せた著者は一連の Śiva 神の nṛtta-mūrti (舞踊像) を古典戯曲論書に規定される karaṇa の概念によって解釈し、舞踊像を唯単に静止的対象としてでなく、その前後の動きの中に流動的に捉うべきことを提唱する。文献して

Nāṭyaśāstra 第4章, Tāṇḍava-lakṣaṇa, 図像 (figure) として Cidambara 寺院並びに Bṛhadīśvara 寺院発見のものを、文献の規定と図像を対比させつつ、両脚の位置、下半身の動きを15の事例のもとに明快に説明する。sama-sthāna (通常直立位置) より始まり kuñcita, añcita (片足の動き), svastika (両足の交互組合せ) 等を経て śīrṣāsana (逆立ち) に到る記述は読者の興味を唆るに充分である。

第15章 *Śiva in Purāṇas* (L. Rocher), 北米屈指の Sanskrit 学者で且つ Purāṇa 研究の第一人者である著者は Purāṇa 文献中の Śiva の位置を一般的文脈に於いて論ずる。先ず、該文献に在って Śiva が Viṣṇu に比して遜色ある事実は Śiva 派 Purāṇa が一般に Tāmasa Purāṇa と称せられること、Viṣṇu の「維持」に対して Śiva が「破壊」をこととしてしていること、Viṣṇu-purāṇa との対蹠に於ける Śiva-purāṇa (屢々 Mahāpurāṇa の位置より降ろされる) の位置、Garuḍa-purāṇa に対応する \*Nandi-purāṇa なきこと等によって示される。著者は更にこの2神の関係を「相互排斥」「一の他への従属」「両者並列」「同一習合化」「交替」の五相のもとに整理し、往昔 Max Müller が提唱した Kathenotheism, Henotheism の概念を適用して、両者の優劣を論ずることが必ずしも有効でない結論する。概して Śiva 教徒の方が Viṣṇu 教徒に対して寛容であったことは前者が基本的に劣勢であったことを指差している。

第16章 *The Myths of Bhakti: Images of Śiva in Śaiva Poetry* (A. K. Ramanujan), 偶像崇拜を斥ける Vīra-śaivism に在って神は nirguṇa とされ (advaita) つつも、bhakti の対象となる時、神は必然的に saguṇa の相を取る (dvaita)。斯くて両者の融合 (dvaitādvaita) に於いて神は理解され、熱狂的宗教詩人の謳うところとなった。Basavaṇṇa, Mahādeviyakka 等より宗教的抒情詩が幾つか英訳されている。

第17章 *Kālidāsa Verbal Icon: Aṣṭamūrti Śiva* (B. S. Miller), Śakuntalā の冒頭にみえる Śiva の八相 (五大と日月と祭主) を中心としてその起源をたどり、Purāṇa 文献中の関連箇所を提示しつつ、Kumārasaṃbhava 5, Megha-dūta, Śakuntalā より Śiva 神ゆかりの章句を英訳し、詩人とこの神の連関を示している。

第18章 *Bhūtas and Bhūtanāyakas: Elementals and their Captains* (M. A. Dhaky), 神像の台座、寺院の長押、椽間等に削られる bhūta (部多, 精霊), gaṇa に関し、Mahābhārata, Matsya-purāṇa, Śiva 教, Viṣṇu 教の各種 āgama, saṃhitā, paddhati より記述を集め、20枚余の図版とそれらを対比させて、その歴史的発展、地理的分布を検討している。

第19章 *Subrahmaṇya as a Supreme Deity* (F. L. Hernalt), Śiva の

息子 Skanda は Tamil 地方に於いて Subrahmaṇya (Murugan) として知られ、山の高みに住む戦士とも苦行者ともされるが、著者は南インド Kongunādu 地方に近世 (15世紀以後) 発達したこの神の崇拜の実態を寺院と祭りの在り方を中心に報告している。他に「常若」(Kumāra), 6 という数、孔雀等この神に親しい諸概念が検討されている。

第20章 *Durgā the Great Goddess: Meanings and Forms in the Early Period* (O. Divakaran). Devīmāhātmya に Mahiṣa-mardinī として知られる女神の研究として興味深い。女神 (devī) が Ambikā から Umā, Kanyākumārī を経て Durgā に到る系譜を示した後、この女神が Śiva のみならず、Viṣṇu の側面をも具えていたことが立証される。即ち自己矛盾性 (吉にして不吉、威怖と恩寵等) は Śiva と共通する (Mahākāla Kālī) が、戦う女神として破邪顕正を事とする時、彼女はむしろ Viṣṇu (の Avatāra) と共有部分を有つ。Mahābhārata に於いても Yudhiṣṭhira, Arjuna は女神に助けを乞い (Durgā-stava, -stotra), Kṛṣṇa 誕生にまつわる Nidrā, Ekānāṁsā, Kauṣīkī も彼女を Viṣṇu に近づける。その所持品 (śaṅkha) や武器も Śiva (triśūla) と Viṣṇu (cakra) の両者に跨る。その像は大別して三種となり、豊穰の女神、苦行の女神、勝利救済の女神に分けられるが、第三のものは更に静的に権力を象徴するもの (Siṃha-vāhini) と動的に武力を行使する型 (Mahiṣa-mardinī) に分けられるという。

第21章 *Śiva Erect and Supine* (W. D. O' Flaherty). 各種の矛盾概念 (生と死、男と女、禁欲と好色等) の自己統一が Hinduism, 就中 Śiva 教の力動的構造を特徴づけているが、それを「能動」と「受動」の視点から解釈しようとする。

第22章 *Śiva and the Cult of Jagannātha: Iconography and Ambiguity* (J. G. Williams). Orissa の Puri を中心に伝わる Jagannātha 信仰には Viṣṇu 教要素 (Kṛṣṇa-Balabhadra-Subhadra, Narasiṃha) と Śiva 教要素 (Ekapāda, Bhairava) が習合されているが、著者は 9 枚の Balabhadra-Cart Images に拠ってこの問題を解析する。

第23章 *Hindu Ascetics in Mughal Painting* (P. Chandra). 16-7 世紀 Mughal の王達 (Akbar, Jahangīr) はヒンドゥ教の苦行者 (主として Śiva 教徒 [Cidrūpa Gosāin, etc.]) に近づいたが、この時代の画家達 (Govardhana, Manohara, etc.) は彼らを如実に描出している。それによってわれわれは往時の行者の衣裳、所持品、行法の実態を知ることができる。但しこの論文はスライドを用いた講演を基にしたため、図版が載っていないのが惜まれる。

第24章 *Musical Art and Esoteric Theism: Muttusvāmi Dikṣitar' s*

*Ānandabhairavī Kīrtanams on Śiva and Śakti at Tiruvārūr* (H. S. Powers). 既に述べたように、この論稿を紹介することは筆者の能力を超えている。但し著者は高名なインド音楽史家であるから、題名のみ上に標記して専門家の参考に供する。

*Discourses on Śiva*

Proceedings of a Symposium on the Nature of Religious Imagery,  
Edited and with an Introduction by Michael W. Meister, University  
of Pennsylvania Press,  
Philadelphia, 1984.